

教育点描

建物は正面だけでよいか

——言語以外のコミュニケーションの意味について



中井 久夫
(神戸大学名誉教授,精神科医)

メールがコミュニケーションの首位を占めんばかりの勢いである。メールは文字どおりの意味しかない。それで「すぐ答えてくれなかった」などの付随的事情で大喧嘩になったりするらしい。絵文字記号を付けないと不機嫌に思われてしまうらしい。

実際、言葉によるコミュニケーションにおいて、言葉の内容の占める割合は、音声で10%,文字で20%ぐらいだという。だから、メールでは返事までの時間や絵文字が重要な意味を持つてくるのだ。

音調や身づくろいなどがコミュニケーションに占める比重は非常に大きい。

人が病気から回復する時にはそれがさらに大きくなる。言葉数が少なくなるのは、病み疲れもあるだろうが、ものごとの始まりとは一般にひっそりと芽生えるものではないだろうか。人を好きになる時も子どもの能力の成長もそうにちがいない。精神障害からの回復の順序がなかなか明らかにされなかったのは、言葉数が少なくなるというためもある。

そういう時は絵画や粘土細工が重要である。回復の進歩や行き悩みをよくわからせてくれるのは絵画や工作である。それがわかると医療者にはげみができる。患者にもわかる。絵や粘土細工を添え木にして、それなしではありえない豊かな言葉のやりとりができる。言語的コミュニケーションを正面とすれば、絵画や工作は側面であるが、正面ばかり立派で側面の貧しい建物はみせかけの建築であろう。

教育においてはいわゆる「五(国数理社英)教科」が「正面」であり、家庭科とか図工などの「実技教

科」は側面であると見立てれば、正面ばかりの家は立っておれまい。

私の出た中学・高校は私学だが、成績や席次を発表しなかった。大学の医学部もそうだった。自分の成績だけは教務課で教えてくれ、答えは朱筆を入れて返してくる。それに留年があるから、勉強はする。ただ、競争はなく、席次を争うが留年はないという今の学校と正反対である。ピアノがうまいとかドイツ語ができるとか、スポーツのスターが出る。総じて「実技教科」的なものが目立つようになる。

個性を発揮できる「実技教科」は「情」を表現する。知情意というが、知も意も情の大海に浮かぶ船、中に泳ぐ魚に過ぎないと脳機能の専門家はいう。

手を動かす作業は頭全体が参加する。「五教科」も向上するはずだが、それよりも「できなかったら大変だ」という脅えがつきまとう「五教科」に対して、「実技教科」は「できてうれしい場」であってほしい。

器用不器用には天性があるので、「五教科」なみに成績を競わせたり、上手下手をあげつらうのは、せっかくのよさがあるのにもったいない。かつて「精緻に描かれた絵とたどたどしい一本の線は哲学的には同等である」と私は書いた。実際、患者への最高の賛辞は「できましたね」と感情を込めて達成を支持することであった。達成の意味が教育では少し違うかもしれないが、達成自体を肯定すること自体がもっとも大きな教育的メッセージであるのは、少年少女でも同じだろう。格差が支配するところには真のコミュニケーションはないのである。

ナカイ ヒサオ

1934年生まれ(73歳)。精神科医。甲南高校、京大医学部卒。阪大で研修。東大分院、名古屋市大を経て、神戸大学医学部精神神経科教授(1980-1997)、甲南大学文学部人間科学科教授(1997-2007)。精神医学の著書、翻訳書の他、7冊のエッセイ集、現代ギリシャ詩とフランス人ポール・ヴァレリーの詩集の翻訳、絵本の再話・訳とさしえ、友人の著書のさしえを描いた。芸術療法学会賞、読売文学賞、毎日出版文化賞、兵庫県社会賞。家族、友人との食事を楽しむ。

[特集] コミュニケーション 能力と 小家,技・家の学習

本郷
健

言語活動の充実と 技術・家庭科の指導



ホンゴウ タケシ
1952年埼玉県生まれ。埼玉大学大学院工学研究科修士(学術博士)。埼玉県立高等学校教諭、埼玉県立南教育センター指導主事、川村学園女子大学教育学部教授を経て、現在、大妻女子大学教授。主な論文に「児童の発達と情報モラル教育の適時性に関する研究」、「情報環境の整備と情報リテラシーの育成」等がある。

1. はじめに

教育課程審議会の中間まとめでは、教育内容に関する主な改善事項として、言語活動の充実が取り上げられた。言語活動の充実は、知的活動(論理や思考)だけでなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤であると位置づけられている。

技術・家庭科では情報通信ネットワークや情報の特性を生かして考えを伝え合う活動を一層重視することが期待されている。メディアを介したコミュニケーションが健全に行われるためには、まずその基礎としての言語力の果たす役割を確認しておく必要がある。

2. 言語力の果たす役割

対面コミュニケーションでさえ、その特徴は「意図明示的で推論的なコミュニケーション」である¹⁾。ここでは音声や文字、表情などのシンボルを介して伝えられる情報から、相手の意図を推論する過程が積層的に繰り返される。まして、メディアを介したコミュニケーションにおいては、限定されたチャンネルによる歪な情報をもとに推論を行わなければならない。受信者は、制限されたチャンネルの情報から、発信者が五感を介して伝えようとした元の情報を推し測りながら、正当な推論を進める必要がある。このように、メディアコミュニケーションでは推し測る力、推論する力、論理的に考える態度が今までにも増して強く求められる。

われわれは、長い時間をかけて推論する力や論理的に考える力を、言語を使いこなす文化の中で身につけて来た。W. J. オングは、私たちが論理的で分析的な思考や推論、さらに問題を分析的に明瞭化する感覚を手に入れたのは、文字を書く技術を身につけてからであると、史実に基づく詳細な分析から指摘している²⁾。考えを筋道立ててまとめていく作業が可能となったのは、書く技術によって「思考の一部を外化」し、「自らから離れる」ことを可能にしたことによると主張し、「離れること」の重要性を強調している。

大切なことは、「離れること」による自己内

省的な思考を可能にする道具を使いこなすことである。例えば、報告書を手で書かせることが重要なのではなく、コンピュータなどを「思考の外化」の道具として位置づけて、利用させる指導と学習環境を注意深く構築することである。

3. 考える視点をガイドする

技術・家庭科は、創造的思考力や問題解決能力の育成を重視する。問題解決や創造性は、自然を理解する科学と人間の欲求を実現しようとする工学や技術とでは少し異なる。科学ならば事実が語るデータとの対話を繰り返し、その背後にある真理や法則性を見出そうとする姿勢が基本となる。

一方、技術・家庭科のような創造的な教科では、「そうありたい、あるいは、そうあるべきだと考える状況や姿」を科学的な根拠から主張し、設計し、提案する問題解決的な姿勢が基本となる。ここでは、自らのアイデアとの絶え間ない対話が繰り返されるはずである。効率性や環境への負荷などといった多様な価値観のすりあわせや、出来上がったものに対する多様な評価の実施などのプロジェクトを遂行する上で行われる知的作業が、言語活動の実践的な指導場面として期待される。そのため科学での問題解決や創造的思考とは一味違った観点や視点から言語活動をガイドする資料が必要となる。

ここでは、問題解決プロジェクトの報告書等を作成するとき言語活動のヒントとなるものを、イギリスの教科書である「デザインとテクノロジー」からその一部を紹介する³⁾。

1) 状況 (引用ページp.18)

「(略)ニーズを知るに至った経緯のなかには、皆さんが行なった探求で書き溜めたノートやそれらを計画した方法を含めるべきです。(略)自分のプロジェクトが実行するに値したものであると考える理由を示します。この評価を探求の間に集められた証言で背後から支えなければなりません。そのために、皆さんの意見や観察、そして潜在的なユーザーを含む人々の意見や観察も報告書に含めるべきで

しょう。」

2) 摘要 (引用ページp.10)

「問題の解決が済めば、解決すべき問題を説明する簡潔な文書を記述できなければなりません。この文章を摘要といいます。それはごく短い文章でもよいのです。(略)大切なのはあまり漠然としていて何が必要かをデザイナーがはっきり理解できないような事態にならないようにすることです。」

3) 調査 「…(略)…」

4) 情報の入手先 「…(略)…」

5) 仕様 (引用ページp.12)

「仕様は、解決すべき問題の詳細な記述です。成し遂げるべきことをはっきりと正確に書き出さなければなりません。同時に最終的な解決に影響するデザインの制限事項をも考慮に入れなければなりません。箇条書きの一覧にしても文章の表明にしてもかまいません。」

仕様
a) その装置は階段の上がり下がり、人を運搬するか補助するか、いずれかでなければならない。
b) 簡単に使用できるものとし、複雑な制御装置などがあってはならない。
c) ユーザはもちろん、周囲の人や動物にとっても完全に安全なものでなければならない。
d) ……………(略)……………

図 仕様の書き方の例 (引用ページp.12)

4. おわりに

上述のように自らのアイデアや考えを整理し、表現し、伝えるための言語活動を丁寧ガイドしている。こうした資料が深い言語活動を支援する。生徒にとって、創造的な活動やそこでの思考の足跡を、具体的なものづくり(プログラミングを含む)を題材として、言語活動を通して明瞭化させることは、創造的思考や問題解決の作業を確認し、内面化する上で大切な自己内省的な学習となる。

【参考文献】

- 1) 正高信男, 考えない人, 中公新書, 2005
- 2) W. J. オング, 声の文化と文字の文化, 藤原書店, 1996
- 3) James Garraff, 高坂文雄[訳], デザインとテクノロジー, (株)コスモ, 2004

[特集] コミュニケーション 能力と 小家,技・家の学習

坂本
廣子

伝えと言葉の力は経験から 食から見た子ども達の現状



サカモト ヒロコ

神戸生まれの神戸育ち。同志社大学英文科卒。相愛大学客員教授。「台所は社会の縮図」として、幼児から高齢者まで誰もがごはんをつくれる人にと食育、安全な調理法の普及、食の村おこしなど、実践的活動を行っている。NHK教育テレビ「ひとりでもできるもん」の生みの親。食文化も含めた幼児からの食育は30年にわたる第一人者。

著書に『坂本廣子のジュニアクッキング』①～⑤、『坂本廣子のひとりでクッキング』①～⑩(偕成社)、『五感で学ぶ食育ガイド キッズキッチンI・II』(かもがわ出版)、『子どもがつくるほんものごはん 生きる力がつく「食育」レシピ』(クレヨンハウス)、『台所育児』、『国産米粉でクッキング』(農文協)ほか多数。

子どもたちの学力低下が、とりわけ読解力と理科的理解力において従来よりも力が落ちて来ているという報告から、世界の中での日本の子どもたちの問題点として注目されています。その対応として、読書の時間、理科の時間を増やせばいいのではないかという意見も出ていますが、教科の時間を増やせば学力が正比例して付くかどうかは分かりません。世界学力調査で第一位のフィンランドの授業時間は今でも日本より少ないのです。

読解力の基本は人間の文化の歩みと軌を一にしています。人は体験したことを意味のある音の塊として「言葉」にし、更にそれを「本」「絵」などに記録します。猿やイルカも「言葉」としてのコミュニケーションをしますが、「記録」はしません。人だけがコミュニケーションの手段として、記録まですることで、ひとりひとりの短い人生の中で体験できる以上のことを追体験できるシステムを持っているのです。「記録」を読み解く力は人が人として生きていくために大切な要素なのです。

今、子どもたちの読解力が落ちてきた大きな原因は、日常生活の中における体験不足にあると思われます。ある高校で家庭科の先生が何気なく生徒に聞きました「ゆで卵は何分ゆでたらできる？」と。学年トップの生徒が「60分」と答えました。ゆで卵も、60分という概念も分かっているけれど、実際の作った体験がないのでそう答えたのでしょう。もっと驚いたのは、「成績の良い彼がいうのだから、そうなんだろう」と彼の答えに誰も疑問を挟まなかったことでした。一度でもゆで卵を作る体験があったらそれは科学的にもおかしいと分かるはずなのに、机上の言葉先行、体験がないけれど言葉だけでわかった気分になっている成績の良い生徒達についての現状なのです。

子ども博物館に学ぶ

人間が記憶するというのは、体験したことを言葉に置き換え、脳に記憶していきます。

その積み重ねを基本として考える力を組み立てていくのです。幼児向けの英才教育で言葉を反射的に覚えさせても、言葉は記号として記憶されても実体験を伴っていないと、理解には結びつきません。短期記憶力の問題であって本当の読解力にはなりえないのです。今、子どもたちは「危ない」、「汚い」とまるでカーリングのように行く先を箒でキレイに掃き、つまずかせないように、その道を外れないようにと、大人が育ってきた時にしてきた体験をさせてもらえずに育ってきています。

けがをさせないことが目的になると、刃物は使わせない、火も使わせない。体験をさせないことが子どもを守るようになってきてから、体験の少ない子どもたちは、「言語力」を失い、考える力や本当の学力、生きる力が弱ってきてしまったのが日本の子どもの現状といえるのではないのでしょうか。

Learning by doing(体験から学ぶ)は子ども博物館の基本理念です。子ども博物館は今から100年以上前にアメリカで異文化コミュニケーションのために生まれました。お互いの文化の背景を知らなければ本当にお互いの理解はむずかしい、文化の背景や言葉が違っていても、共通の体験をもつことで、共に暮らしてゆくための基本的なコミュニケーションができるという理念に基づいています。言葉が先行するのではなく、体験から学んでゆく教育法を「Hands-on」と呼びます。大人の博物館の目的は保存と解析ですので展示物にはさわらないで「Hands-off」ですが、子ども博物館においては「触って、見て、五感で感じて理解して」なのです。

実際に子ども博物館では、体験をきちんと「言語化」し、科学的にも正しく理解ができるように展示を工夫しています。言葉を羅列して覚えさせるのではなく、本物を体験させ、その体験を言葉にし、表現するという人としての思考の原点を育てる方法論であると思います。言葉は国によってさまざまですが脳が記憶として受け取るのは、五感を通して言語

化したものだけで、暑くも寒くもない部屋の中で英語のビデオを見せて“hot”といっても、脳は体験として受け取りません。汗だくになっているときに「暑いね」と言葉をかけるときちゃんと「暑い」が共通認識として理解出来るようになるのです。

家庭科体験の重要性

今、子どもたちが育っている家庭、体験も個人差がとても大きくなっています。昔に比べて家庭の中で体験する家事も減ってきました。社会全体として意識しない体験不足社会なのです。「食糧自給率の低下で食べものがスーパーマーケットになくなってしまったらどうする？」と子どもに聞くと「コンビニに行けばいい」と答えます。世代間コミュニケーションが必要な時代になったのかもしれない。親の背を見て子どもは育っていないのです。

また、中学2年生になって、円が描けない、正三角形が描けない子ども達も出てきました。自分の身体が自分の思うように動かさないので。それも、自分の手でこれくらいの力を入れたらどうなるかという、昔の子どもの手の体験がないためなのです。五指を五指全部別々に動かすのが人間、五指あっても二指として使うのが猿、遊びがゲーム中心になると、世界一親指が早く動いてもそれは猿のトレーニングということになるのです。

五指、五感をフルに使うことが人としての育ちの中で欠かすことの出来ない体験です。それも、調理など、目的を持って体験してこそ、段取りなどが身につきます。きちんと伝えるためには、お互いにコミュニケーションをとらなくてはでき上がりません。バーチャルではなくリアルで実感で学ばなければ、現実の社会に生きてゆく力にはなりえません。長い一生を生きてゆくための本当の学びの力を担えるのは体験を通して学ぶ学科にこそあるのではないのでしょうか。

「言葉と体験」を充実し『あったかな生活』に迫る

～第44回全国小学校家庭科教育研究会
全国大会(北海道大会)の研究から～

北海道小学校家庭科教育連盟

1. はじめに

平成19年10月の第44回全国小学校家庭科教育研究会全国大会(北海道大会)開催にあたり、平成16年度より新しくなった本研究会の大会主題を受け、北海道小学校家庭科教育連盟では、平成17年度より研究主題「ねがいをもち、あったかな生活を創り出す子ども」を掲げ、授業実践を重ね、研究に取り組んできた。本連盟では、研究主題設定に当たり「実践的・体験的な活動を通して家族や家庭生活を自分ごととしてとらえ、心豊かな生活を営んでいこうとする気持ちを育むことができる」という家庭科の特性をいかし、子どもにとって「**実感のある学びを創る**」ことを重視した。特に、本大会では、北海道の児童の実態や地域性を踏まえ、家庭科で求めてきた「よりよい生活」や「豊かな生活」をより充実発展させながら、主体的に生活を創り出そうとする意欲や心情面での育ちを大切にしたいと授業づくりを行った。

また、授業づくりでは、家庭生活の中における「もの」「ひと」「こと」のかかわりを、**〈確かな力の定着〉〈意欲の喚起と持続〉〈家庭を中心とする子どもを取り巻く環境との共生〉**の視点から再構築することに努めた。

本稿では、今大会の授業実践の中から、問題意識の形成や連続にかかわる学習活動を支えたり、生活への感性をはぐくみ家族との触れ合いを深めたり、他者とのコミュニケーション能力を育てたりするための基盤となる「**言葉と体験**」に焦点をあて考察する。

2. 本研究の『あったかな生活』と『ねがひ』

本研究主題には、北海道の豊かさや自然の大きさや厳しさの中で、家族の絆を大切に生き生きと自己実現に取り組む姿を発信したいという意図のもと、子どもたちの生活実感により近く温もり

を感じさせる言葉として、あえて「あたたかい」を用いずに『あったかな』を掲げた。本研究では、『あったかな生活』を、自分の周りの人々や環境とかかわることの大切さを自覚し、主体的に家庭生活にかかわり、家族の一員として役に立つ喜びを実感しながら自己実現を図る生活とした。

子どもが教材と出合った時に感じる「こんなことができたらいいな」という「思い」を生かし、自分の生活をしっかりと見つけ「思い」を具現化するための見通しや手立てを明らかにさせることで、問題意識を強くもたせる。この意識に、生活的な自立の基盤となる知識や技能の必要感や家族を大切にしたいという心情や態度などが付加されることで、一人一人の目的意識がより明確になる。このように、「思い」をより具体化させ鮮明にしたものを『ねがひ』とした。

『ねがひ』は『あったかな生活』に「近づきたい！実現したい！」という原動力ととらえ、子どもの実態と、教材のもつ特性や価値とを的確に把握し、集約することで学習課題に高められる。『ねがひ』は、問題解決的な学習の流れの中で広げ深められ、学習活動を通して実現し、家庭生活で醸成されることで『あったかな生活』に迫ることができると考え、めざす子ども像を設定した。

《めざす子ども像》

- 五感を働かせ主体的に学びを重ね、
家庭生活に愛着をもつ子
- 生活者としての自立の基盤を身に付け、
生活に生かす子
- 家族や地域の人々とかかわりながら、
生活を工夫する子

3. 『あったかな生活』に迫るための学習活動

「**言葉と体験**」は、学習活動の中で別々のものとして存在しているのではなく、双方向に深いかか

わりがある。言葉を重視し体験を充実させることや、言葉と体験をつなぐ学習を意識した学習活動を展開し、『ねがひ』の実現に向け問題解決的な学習を連続し深化させることで『あったかな生活』に迫ることができる考えた。

《実践例1》 札幌市立幌西小学校
題材名 5年「くふうしよう！かしこい生活～Let's かしこい消費者～」

(1) 教材化の視点

本題材では、子どもたちが自分の小遣いで購入できる文房具の中で、身近でどの子どもにも購入経験がある「消しゴム」を具体物として教材化した。現在店頭には並ぶ消しゴムには、様々なデザインや種類があり機能も多様である。しかし、子どもたちは、第一印象で選んでいることが多い。そこで、子どもの意識を揺さぶるために教師が吟味して用意した様々な消しゴムを提示した。「どれがいい消しゴム？」と問うことで、子どもたちは問題意識をもち問題解決を連続させ、『あったかな生活』に迫ることができる考えた。このことが、見た目だけではなく、自分にとっての必要性や品質などをしっかりと考え、選択購入しようとする消費者意識形成の第一歩となり、中学校家庭科の学習へつながるものと考えた。

(2) 学習活動の構成(体験の質、価値を問う)

本題材では、家庭での消費活動に関心をもち、買い物の仕方を工夫できるようにするため、体験として3つの手立て(学習活動)を取り入れた。

① いい消しゴム選び→体験と言葉をつなぐ

子どもたちに第一印象で好きな消しゴムを一つ選ばせ、自分はどのように商品を選んでいるかを意識させた後、率直に自分の言葉で表現させた。

② 消す活動→体験を通して問題意識を高める

様々な消しゴムを実際に使用し「手と頭」を用いて比較し、それぞれの消しゴムの機能の違いを実感させ交流した。

③ 自分のペンケースを見直す→

実感の伴う生きた言葉を用いた交流

消しゴムの選び方を自分ごととして再度見つけ直すことで、第一印象だけで購入してはいけないという意識をさらに高めた。この様に、体験の質を高める活動を充実することで、自分の無駄遣いや自分を取り巻く環境に関心をもち、実生活の中

での実践意欲を高めることができた。

4. 心情をゆさぶる体験を重ね問題を解決し、『あったかな生活』に迫る

《実践例1》 札幌市立山の手南小学校
題材名 6年「つくって 楽しくHOT COM. ～みんなあったか どさんこ料理～」

本題材では、自校で取り組む給食のフードリサイクル事業で出た堆肥を使い、自分たちが育てた「じゃがいも」を食材とし、1食分を用意することをねらいとした。本題材(13/13時間目)の授業公開は、学校での調理学習後、週末に各自が「あったかランチ」を作り、家族と共に食事をした交流から始まった。「喜んでくれた！」という言葉が次々に発せられた後、家族から感謝の手紙が届いた。子どもたちからは、「**食事は、家族と家族をつなぐ大切なものだから『あったかな食事』を家族みんなで食べたい!**」という『ねがひ』がこめられた声(言葉)がたくさん発せられた。

《実践例2》 札幌市立手稲山小学校
題材名 5年「くふうしよう！季節に合うくらし～快適・素敵・あったかライフ～」

本題材では、北海道の寒さを工夫して快適な生活をつくることを目的とし、環境教育の視点も取り入れ、ウォームビズや再生利用可能な毛糸などを教材化した。授業公開では、「家族の○○のためにこんなものを作りたい」と具体的な思いを描かせ、指編みの試し作りを行った。本授業公開後には、使う相手への想いがこもった「あったかグッズ」が完成し、プレゼントされた家族からの感想を交流したり展示会を実施したりした。これらの学習から、言葉は、相手意識を高めさせコミュニケーションをするためのツールとして、重要な役割を果たしているということを実感した。

5. おわりに

本稿の実践は、全国大会での13本の授業公開の一部である。本連盟では、全授業づくりを通じて「子どもにとって価値ある体験」を求め活動構成の充実と工夫を行った。今後とも、「**言葉と体験**」を重視し、充実を図りながら授業改善に努めたい。(文責：札幌市立美しが丘緑小学校教頭 石崎久美子)

生活に生きるコミュニケーション能力の育成

～道徳的実践力を高める「情報モラル」の指導を通して～

宮崎県宮崎市立赤江東中学校 川越 広幸

1. はじめに

情報通信社会の発達、各家庭へのパソコンの普及により、ネットワークを利用して、世界中の誰とでも関わりをもつことができるようになってきた。情報社会での新しいコミュニケーションが生まれてきたとも言える。生徒についても、パソコンや携帯電話を使って、身近な友達との電子メールのやりとりをしたり、チャットなどにより、知らない人とコミュニケーションを図ったりするようになってきている。

しかし、「ネット上のいじめ」など、情報モラルを欠いた事件が年々増加しており、社会問題になっている。生徒は好奇心が旺盛で、パソコンや携帯電話などに関する機能をすぐに覚える。そして、正しい知識や判断力がないままに行動し、思わぬ失敗につながるケースがある。

そこで、情報を収集・処理・発信する際のルールやマナーを指導し、インターネットを介したトラブルに巻き込まれないための知識や技能を身につけさせるとともに、生活に生きるコミュニケーション能力の育成を図りたいと考え、次の内容を実践した。

2. 実践の方向性

(1) 情報機器のコミュニケーション分析

パソコンや携帯電話におけるコミュニケーションについて、その時必要となってくる能力について分析を行うことは、情報モラルの指導を行う上で大切なことであると考え。単なる知識の伝達や、問題を避けるための技術についての指導ではなく、以下の4つの内容を総合的にはぐくんでいくことが、重要となってくる。

○人や社会とのよりよいコミュニケーション活動への関心・意欲・態度

○情報を適切に判断できる思考・判断力

○情報を正しく活用するための知識や技能

○温かい人間愛の精神と、他の人々に対して思いやりの心をもった道徳的実践力

(2) 生徒どうしが互いに高め合う学習

本県の技術・家庭科研究会では、平成13年度から5年間、他者との相互作用により、生徒の思考を錬磨していくための研究を行った。それによると、授業を、教師の意図的なゆさぶり(認知的不均衡状態を演出)と問題解決に向けた討論を中心に展開していく。そのため、他者(仲間、教師、教材、地域の人)の様々な考えや高い段階の考えに触れさせたり、他者(仲間、教師、教材、地域の人)からの評価に触れさせるなど、他者との相互作用を推進していくことが教師の役割となる。このことが、問題解決に向けた思考活動を推進し、初期段階で考えた自分の考えの練り直しにつながっていく。

今回の実践においても、この思考活動を通して、情報を適切に判断できる思考・判断力の高揚を図っていく。

(3) 道徳の時間の流れを活用した情報モラル教育

情報モラル教育は、「～すべきではない」という禁止事項を教えるだけではなく、道徳教育との関連を図りながら生徒の内面に根ざした指導が大切だと考える。よって、道徳の時間の流れを活用して、生徒の心に響く授業を目指して授業を行った。

3. 授業の流れ

①インターネットや携帯電話を使ってできることを発表する。

身近な生活の場から課題意識をもたせるために、家庭での生活を振り返らせて考えさせるようにした。生徒からは「メール、チャット、ネットショ

ッピング、電話、音楽のダウンロード」などの多くの意見が出たので、「携帯電話は、もはや電話でない」ことを伝え、本時の目標への方向付けを行った。

②本時の目標を確認する。

「これまでのインターネットの活用を振り返り、情報を正しく収集・発信しよう。」

③資料を通して考える。

一郎君は、転校していった友達から、花子さんの住所を教えて欲しいとメールで頼まれました。他の人の住所も聞かれると面倒なのでWebページにクラス全員の友達の名前、住所、電話番号を載せました。

実際の生活場面で起こりうる事象を資料として取り上げ、そのことを通して考えを深めた。まず、自分で考え、次に班の友達と話し合い、その後発表をするという形態をとることで、他者との相互作用による思考の高まりを図った。



図1 他者との相互作用をねらった班での話し合い

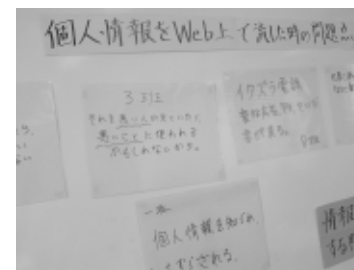


図2 全体討議で活用した班の意見

そして、資料から離れ、家庭でインターネットをしている場面を生徒に演技させ、それを視聴させることで、自分の生活を振り返らせた。また、インターネットは、全世界の様々な人々とつながっていることを感じ取らせるとともに、演技者に感想を発表させた。これは、情報モラルが単なる知識で留まるのではなく、実際の生活場面で生き

てはたらく力につなげるための手立てである。



図3 役割演技

最後に、情報を収集・発信する際の心構えを発表させた。学級の仲間と共に、情報モラルを身につけ、情報社会をより豊かで安全なものにするために、生活を工夫改善していこうとする意欲の高揚が見られた。



図4 これからの情報に係る生活について考えている場面

〈生徒の意見〉

・今後、自分のサイトを作ることがあったら、「悪口やイタズラはしない」を守って、多くの人とコミュニケーションのとれる楽しいサイトにしたいです。

4. おわりに

今回の実践では、情報モラルが単なる知識に留まるのではなく、実際の生活で生きてはたらく力になるよう、道徳教育との関連を図った。情報社会を豊かで安全なものにするために、よりよいコミュニケーションを行っていかうとする意欲の高揚が見られた点では成果があった。今後は、教科、道徳、特別活動などの特性を生かして、系統的な指導について考えていきたい。

【参考文献】

『インターネット活用のための情報モラル指導事例集』財団法人コンピュータ教育開発センター

技術分野で育てる「確かな学力」

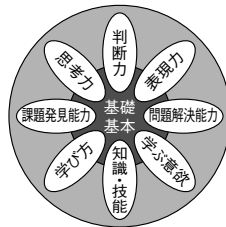
～表現力(コミュニケーション能力)の育成～

島根県雲南市立海潮中学校 高橋 一郎

1. はじめに

現行の学習指導要領では、変化の激しいこれからの時代にしなやかに対応して生きていくための「生きる力」を児童生徒に育成することをねらいとして示している。

この「生きる力」の知的側面が「確かな学力」であり、文部科学省では右図のような概念モデルを使用している。



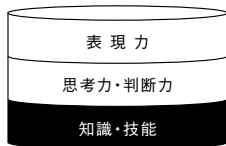
技術・家庭科は、社会の変化に主体的に対応できる人間の育成を目指して、自立した生活ができるようになることや自分なりの工夫を生かして生活すること、学習した内容を進んで生活の場に活用する能力や態度を育成することをねらいとした教科であり、「確かな学力」を育成するための中核となる教科であると私は考えている。

しかし、これまでの自分の実践を振り返ってみると概念モデルの中の8つの学力要素のうち、表現力の育成については、あまり意識して取り組んでこなかった。次期学習指導要領では「言語力」の育成が重要視されることを踏まえ、技術・家庭科(技術分野)の授業で表現力をどう育成するかについて考えてみた。

2. 2年生における実践

(1) 表現力育成のカリキュラム

表現力を育成するためには、単に表現技能の指導を行うのではなく、相手に伝えたい情報をどのように表現すれば効果的に伝えることができるのかを考える思考力や自分の持つ情報が相手を納得させる根拠となりうる情報かどうかを判断する判断力などと一緒に育成することが不可欠であると考えます。すなわち、生徒に表現力を育成することは、知識・



技能の確実な定着を図り、その知識・技能を基にして熟考させたり判断させたりしながら、自分の思いを的確に表現することのできる力を総合的に育てることである。

そのためには、意図的に表現力の育成をねらいとしたカリキュラムが必要になる。今回は2年生の「情報とコンピュータ」の授業において、これまでに学習した応用ソフトウェアを統合的に活用することを目的とした「環境問題啓発ポスターの作成」を題材とした授業を行い、この学習プロセスで収集した情報を基に、環境問題についてプレゼンテーションを行う指導計画を立てた。

なお、本校には本年4月に赴任し、昨年度の指導計画を大幅に見直したため、変則的な指導計画となっていることをご了解いただきたい。

指導計画

- ・図形処理ソフトウェアの機能 (2時間)
 - ・表計算ソフトウェアの機能 (3時間)
 - ・環境問題啓発ポスターの作成 (5時間)
 - ・プレゼンテーションソフトウェアの機能 (5時間)
 - ・プレゼンテーション発表 (1時間)
- (文書処理ソフトウェアについては、1年生の時に学習済み)

(2) 環境問題啓発ポスターの作成

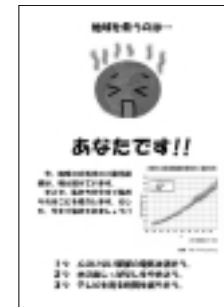
環境問題は今日的な課題であり、技術・家庭科以外の教科でも学習するため、生徒の興味・関心は高く、意欲的に学習を進めることができる題材であると考えます。

生徒達は、環境問題の概略について関連する本やインターネットでまず調べ、その中から自分のテーマを決定して課題解決学習を進めていった。

ここでは、論理的思考力や批判的思考力を高めるため、「なぜ?」を重視して学習プロセスを組んだ。「地球温暖化の防止」を例にあげると、「なぜ

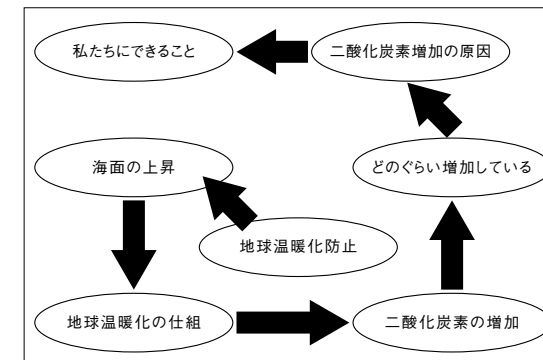
地球温暖化の防止が必要なのか?」「なぜ地球温暖化が起こるのか?」「なぜ大気中の二酸化炭素量は増え続けているのか?」など「なぜ?」の問いを繰り返し、その答えとなる情報を収集させた。ここで収集した情報がポスターやプレゼンテーションの基礎データとなる。

ポスター制作では、サイズはA3、文字情報は最小限度とし、表計算ソフトウェアで作成したグラフや図形処理ソフトウェアで描いた図を使用して視覚的に訴えることを重視した。



(3) Webマップによる思考の組立

表現力の向上のためには、収集した情報を互いに関連づけて、わかりやすく論理的に表現することが大切である。そのため、Webマップを用いて思考をまとめる方法を授業の中に取り入れた。



Webマップは、紙の中心に自分のテーマを記入し、自分が調べた情報を周囲に記入していき、それらの情報をどんな順序でつなぎ合わせて表現すれば相手に良く理解してもらえるか、情報の構成関係を考えて矢印で結んだ思考マップである。

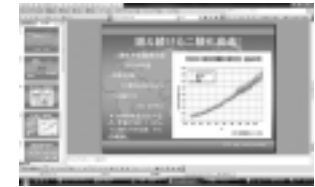
このWebマップを作成することにより、論理的にプレゼンテーションを行うことができると考えた。

(4) プレゼンテーションの作成

Webマップの完成後、その構成に従ってプレゼンテーションのスライドを作成した。生徒達は、6~7枚のスライドで自分の主張がまとまるように画面構成を工夫して作成した。ここで重視した

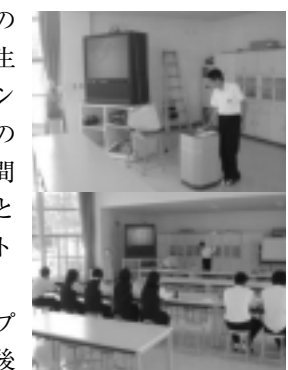
のは、循環的思考である。

スライドができたからスライドショーを実行して全体を俯瞰し、気になる箇所の修正を行い、また俯瞰してみる。この繰り返しにより自分の思いが伝わるスライドを作成することができる。



(5) プレゼンテーション発表

本校は全校生徒43名の小規模校である。2年生は9名のため、プレゼンテーションも一人5分の時間設定としても1時間の授業の中で終わることができるというメリットがある。



技術分野で学習したプレゼンテーションを今後の学校生活の様々な場面で活用して欲しいという願いから、プレゼンテーションの発表はコンピュータ教室ではなく、生徒総会等でも使用するランチルームの大型プロジェクターテレビにコンピュータを接続して行った。

生徒達は少々緊張しながらも、環境問題に対する自分の思いを込めたプレゼンテーションを行うことができた。また、生徒相互評価を実施することにより、声の大きさや喋り方等について、友達を評価することを通して適切な表現のあり方について学ぶことができた。

3. おわりに

技術分野における表現力の育成については取り組み始めたばかりで、課題や改善点も多々ある。現在は1年生の授業で自分のものづくりの構想をプレゼンテーションする授業を計画しているところである。技術分野における表現力を含めた「確かな学力」の育成のためには、学力育成のために3年間を見通したカリキュラムをどのように意図的に組むことができるか、教師のカリキュラムマネジメント力が求められていると強く感じる。

コミュニケーション能力を高める 連続した学びの研究「簡単な和食の弁当」

～調理実習の積み重ねと、生徒のコミュニケーション能力の高まりについて～

横須賀市立鷹取中学校 松田 智恵

1. はじめに

これからの技術・家庭科教育に求められることは何か。知・徳・体の調和のとれた発達、個人の自立、他者や社会との関係、自然や環境との関係、伝統文化を基盤として、国際社会を生きる日本人…、「自立と共生」を中心に、豊かな生き方を支える力をつけ、自然や他者を尊重し、新しい時代を切り拓ける力を持った生徒の育成を、とのことである。

それは家庭科にとって全く新しいことかといえは、そうではないのではないだろうか。今まででもやってきたことであり、これからも続けることであると考える。

技術分野だけでなく、家庭分野にもいえることだが、デザインプロセスの学習過程として、直線型ではなく円盤形のサークルモデルが中心となっていく。その中心は「生徒の学びの必然性、切実感」であり、その周りに「問題の所在」、「計画」、「実践」、「振り返り」が輪となってつながっている。

体験と言語活動(思考・判断・表現等)による「知識・技術活用力」、「意思決定能力」の育成が求められ、意図的な指導、適切な評価ができる題材開発をしなければならない。

その整理のポイントは、「実生活において不可欠」であり、「様々な専門分野の学習を進めていく上で共通の基盤」となり、「思考力・判断力・表現力等の育成」ができる題材で、陳腐化しない知識や技能を身につけさせることであろう。

教育課程が改訂されても、技術・家庭科が今まで研究推進してきたことははずれることはないと思っている。本稿では、第46回関東甲信越地区中学校技術・家庭科研究大会で提案した、実習時間の確保と1時間で可能な調理実習「簡単な和食の弁当」の研究について、コミュニケーション能力の

育成にどう関わっているかをまとめることにした。

2. 研究仮説

学習内容の重複を避け、さらに授業時間の確保に工夫をし、調理実習を繰り返すことで、生徒は反省を次に生かして定着の効果を上げることができ、自分の工夫が生かしくなる。また、楽しく美味しい体験が次の実習や家庭での実践へのモチベーションを上げる。それにより生活の主体として生き生きと活動する生徒の育成につながると考える。

実習の作業で協力し合うだけでなく、班毎の献立の計画や反省の話し合いでも言語のコミュニケーション能力は高まるのではないかと。

また、作ってあげる対象を決めた食事作りのレポートや、テーマを決めた実技テストを積み重ねることで、家庭での会話も増え、自分の工夫を表現することができるようになると、考えた。

3. 研究内容

(1) コミュニケーション能力を高める調理実習の工夫

- ・弁当の形で1時間の実習を積み重ねる。試食を昼食時にすることで時間を節約できる。
- ・生活班で実習する献立を決めることで、お互いの好みや予算についても話し合う。アドバイスをし合うことも有効。
- ・実習の積み重ねで、より合理的な方法で協力しながら調理を行うようになる。
- ・班毎に精算、実習の反省をし、それを学級で聞き合うことで次の実習に生かし、つなげていく。
- ・実技テストを行うと、テストに向けて家庭で練習をする。家庭での会話が増えるだけでなく、アドバイスをもらって家庭での関係がさらに良

好になる様子が多く見られた。



図1 実技テストの工夫
(プレーンオムレツ・きゅうり切り)

(2) コミュニケーション能力を高める課題解決学習の工夫

- ・レポート「〇〇さんのための健康を考えた□□」。

作る対象の好みや健康についてリサーチし、一生懸命作ることで人と人のつながりを強くできる。美味しいと喜んでもらえる体験が、次はさらにもう何かを作ろうという意欲を高める。



図2 自作カードを手渡す

- ・実習(個人が考え、作る。前半後半に分かれ、半分は片づけなどの手伝い)「〇〇嫌いな人にそのおいしさをわかってもらえる料理」

野菜や魚など、嫌いな人にはその理由を、好きな人にはその食材のおいしさをリサーチすると、自分と他の人との違いに驚いたりしつつ、調理法や味付けに工夫をしていく。

できたものを試食し合い、評価し合うことも大変有効である。

4. 研究成果と課題

(1) 研究の成果

○生徒の様子

実習を繰り返して、次につなげることで、生徒はモチベーションを上げ、自分自身の進歩を実感出来たようである。前期と学年末の様子を比較してみると、仕事を分担して効率よく進められるよ

うになり、見通しを持って動ける生徒が増えた。それまで遠慮して手を出さなかった生徒も自信を持ち、積極性が高まった。

○生徒の声より

- ・手伝いを自分からするようになった。
- ・切るのがうまくなった。
- ・作れる物が増えた。苦手を克服した。
- ・家でも料理するようになった。
- ・食べ方が変わった。栄養を気にするようになった。
- ・野菜をたくさん食べるようになった。

○家庭での様子の変化(アンケートより)

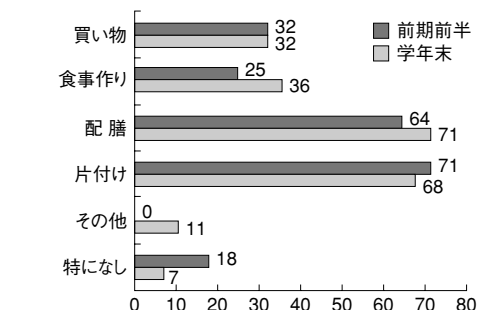


図3 「日常的に手伝っている食の仕事」(単位%)
学習後に食事を作ったりゴミを分別して捨てたりする生徒が増えたが、「特になし」をなくすことは出来なかった。さらに丁寧な指導が必要となるであろう。(鷹取中学校1年生)

(2) 今後の課題

生徒の実態を的確に把握し、教師が定着させたいことと、生徒の必要感や感覚にFIT(ぴったり合う)MATCH(調和)した授業の研究を今後も続ける必要がある。常に変動し続ける社会に対して目を向け、生徒の感覚、必要感によりそった、適切な教材の設定をしなければならない。変化し続ける生徒の生活や感覚の実態把握、限られた時間数の中での豊かな体験の積み重ねの確保をし、生徒の高まりを適切に判断するための資料と評価の研究など、と課題は多い。

教師の願いと生徒の思い、そして教材が調和してこそ、よい授業が生まれるのである。

生徒を取り巻く環境は日々変容している。50分の授業の中でいかに生徒を高めることができるかを、我々教師一人一人が問われているのだと考えている。

小グループでのロールプレイングを取り入れた指導

～幼児への接し方を演じて考えよう～

名古屋市立久方中学校 横山 文恵

1. はじめに

他の生徒の考えや工夫を参考にしたり、共有したりする場面を設定することで、生徒は、自分なりの考えや工夫を深めたり広めたりすることができる。と考える。

そこで、小グループでロールプレイングを行い、観察し合い、よかったところや気付いたところを伝え合うといった評価活動を取り入れた指導を行えば、生徒は、お互いに、意見が出しやすくなるため、考えや工夫の共有が効果的にできると考える。その結果、一人一人の考えや工夫に、広がりや深まりが見られるようになるのではないかと考える。

2. 実践の内容

(1) 単元 幼児の心身の発達と家族の役割について考えよう

(2) 学習計画(6時間完了)

①どのようにして成長してきたのだろう

【5時間】

- ・身体 の 発達 2時間
- ・心 の 発達 2時間
- ・生活習慣 の 習得 1時間

②幼児の成長と家族 【1時間】〈本時〉

(3) 本時の目標

- ・幼児の成長にかかわる家族の役割を考えながら、ロールプレイングしたり、話し合いに参加したりしようとする。
(関心・意欲・態度)
- ・家族だけでなく、自分も含めた周囲の人々が幼児の成長のために、どのように接していくとよいか、自分なりの考えをまとめることができる。
(工夫・創造)

(4) 学習過程

①本時の学習課題をつかむ場面

幼児との会話を、幼児役、身近な大人役、観察者の3～4人グループを作り、ロールプレイングで体験したり、演じている人を観察したりする中で、家族を含めた幼児の周囲の人びとの役割について考えるという課題を、生徒に提示する。

ロールプレイングの場面設定

幼児役：うれしいことがあって、身近な人にそれを聞いて欲しくて、話したくてしかたがない。

例：『あのね、お母さん、今日ね、縄跳びいっぱい跳べたんだよ！』

大人役：何か仕事や家事をしていて、手が離せない状況で、幼児の話を、今はじっくりと聞けない。
※大人役の3つのパターン

A：返事はするが、幼児の方を見ずに仕事や家事を続ける。

B：仕事や家事の手を止め返事をするが、会話をそのまま続けようとはしない。

C：幼児の顔をよく見て、ある程度会話を続けるが仕事や家事を続けたいので詳しいことは後で聞くとしている。

②課題解決の方法を考える場面

幼児役の初めのせりふは決めておく。大人役のせりふは、それぞれのパターンに合わせて考え、ロールプレイングの前に、台本のプリントに記入しておく。

③考えた課題解決の方法に沿って実践し、見通しを確かめる場面

3～4人一組の小グループを作り、教室各所で一斉に、ロールプレイングする。

役割をはっきりさせるために、首かけボードをつけて行う。(教師側の観察もしやすい。)

あらかじめ考えたせりふにこだわらずパターンに応じて、幼児や大人役の気持ちを考えながら

ロールプレイングする。

観察者は、演じている生徒の台本に、実際に話した言葉を記録する。また、ロールプレイングで、よかったところや気付いたところを観察記録に記入する。

小グループ内でローテーションして、幼児役、大人役、観察者の3つの役割をすべて行う。

その後、それぞれのパターンでの幼児役、大人役の気持ちについて、小グループで話し合う。

④追究の成果を共有し合い、新たに得た知識や技術を生活の中や次の授業に結びつけていく場面

幼児にとって、身近な大人は、どのように接するとよいか、小グループでの話し合いの結果を、全体の場でも出し合う。

そこで出されたいろいろな考えをもとに、幼児とどのように接していくとよいか、自分なりの考えをまとめる。

3. 生徒の様子

(1) ロールプレイングの様子

3～4人一組が、一斉に、教室各所で行う方法であるので、生徒は構えることなく、のびのびと、それぞれの役を演じていた。



〈教室内の様子〉



〈ロールプレイングの様子〉

(2) 生徒の考えの広がりや深まり

◎観察記録の記述内容を見ると、よかったところや気付いたところについて、率直な意見が出されていたことがわかる。

『よかったところ』

- ・子どもの本当の気持ちをよく伝えていた。「今!今!」「ヤダ!ヤダ!」ってずっとすねていた。なかなか「いいよ。」と言わなかったところがよかった。
- ・ねばり強くて、聞いて欲しい気持ちが伝わってきた。たたいたり引く張ったりして気を引こうとしているのがよくわかった。
- ・幼児の方を向いて優しく会話していた。幼児の強引さに負けないで、必死で説得していたのがよかった。

『気付いたところ』

- ・子どもは、もっと聞いて欲しいがる。
- ・この答え方だと、幼児がまだ、だだをこねそうなので、納得しそうにない。
- ・ちゃんと目を見て会話すると、気持ちが伝わると思う。
- ・幼児は、お母さんが少し冷たいと必死に聞いてもらおうとするし、ちゃんと聞いてもらえたら、少しうれしそうに話していた。

◎全体の場では、幼児を納得させるための接し方についての意見が出された。

- ・幼児の気持ちを尊重してわかるように話す。
- ・幼児と同じ目線で接する。

◎幼児とどのように接していくとよいかについての記述では、幼児の立場と身近な大人の立場の両方からの考えが記述されていた。考えの広がりや深まりがあったと考える。

- ・幼児にいろんなことを伝えるのはすごく難しい。でも、ちゃんと今の状況をわかるように説明して、やさしく話せば伝わるんだということがわかった。自分は、幼児を一人の「人」として対等な立場で接していくことが大切だと思う。
- ・幼児の気持ちになって、感情的にならず、やさしく気長に接していかないと、自分と幼児の思いが、すれちがうと思う。

【参考文献】

伴野直美『あのね、お母さん』、『エンカウンターで学級が変わるパート3 中学校編』図書文化

(小学校：家庭)

(ア)中学校の内容との体系化を図り、生涯の家庭生活の基盤となる能力と実践的な態度を育成する視点から、①家庭生活と家族、②食事のとり方や調理の基礎、③快適な衣服と住まい方、④身近な生活と消費・環境に関する内容で構成する。

(イ)社会の変化に対応し、次のような改善を図る。

a 家族の一員として成長する自分を自覚し、家庭生活を大切にする心情をはぐくむことを目指した学習活動を一層充実する。

b 食事の役割や栄養を考えた食事のとり方、調理などの学習活動を一層重視するとともに、身の回りの生活における金銭の使い方や物の選び方、環境に配慮した物の活用などの学習について、他の内容との関連を明確にし、実践的な学習活動を更に充実する。
(ウ)家族の生活と関連させながら衣食住などの内容を取り扱うことを一層重視する。また、小学校第4学年までの学習を踏まえた2学年間の学習のガイダンス的な内容を設定するとともに、他教科等との関連を明確にし、連携を図る。

(中学校：技術・家庭[技術分野])

(ア)現代社会で活用されている多様な技術を、①材料と加工に関する技術、②エネルギーの変換に関する技術、③生物育成に関する技術、④情報活用に関する技術等の観点から整理し、すべての生徒に履修させる。その際、小学校や中学校の他教科等における情報教育及び高等学校における情報教育との接続に配慮し、従来の「B情報とコンピュータ」の内容を再構成する。

なお、ものづくりなどを通して基礎的・基本的な知識と技術を習得させるとともに、これらを活用する能力や社会において実践する態度をはぐくむ視点から、各内容は、それぞれの技術についての「基礎的

な知識、重要な概念等」、[技術を活用した製作・制作・育成]、「社会・環境とのかかわり」に関する項目で構成する。

(イ)創造・工夫する力や緻密さへのこだわり、他者とかかわる力及び知的財産を尊重する態度、勤労観・職業観などの育成を目指した学習活動を一層充実する。また安全・リスクの問題も含めた技術と社会・環境との関係の理解、技術にかかわる倫理観の育成などを目指した学習活動を一層充実する。

(ウ)小学校での学習を踏まえた中学校での学習のガイダンス的な内容を設定するとともに、他教科等との関連を明確にし、連携を図る。

(中学校：技術・家庭[家庭分野])

(ア)小学校の内容との体系化を図り、中学生としての自己の生活の自立を図る視点から、①家族・家庭と子どもの成長、②食生活の自立、③衣生活と住生活の自立、④家庭生活と消費・環境に関する内容で構成し、すべての生徒に履修させる。

その際、学習した知識と技術などを活用し、これからの生活を展望する能力と実践的な態度をはぐくむ視点から、家族・家庭や衣食住などの内容に生活の課題と実践に関する指導事項を設定し、選択して履修させるようにする。

(イ)社会の変化に対応し、次のような改善を図る。

a 家庭の機能を理解し、人とよりよくかかわる能力

の育成を目指した学習活動を一層充実する。また、幼児への理解を深め、子どもが育つ環境としての家族と家庭の役割に気付く幼児触れ合い体験などの学習活動を更に充実する。

b 食生活の自立を目指し、中学生の栄養と献立、調理や食文化などに関する学習活動を一層充実する。家庭生活と消費・環境に関する学習については、他の内容との関連を明確にし、中学生の消費生活の変化を踏まえた実践的な学習活動を更に充実する。

(ウ)小学校での学習を踏まえた中学校での学習のガイダンス的な内容を設定するとともに、他教科等との関連を明確にし、連携を図る。

【参照URL】 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf